光背五仏について

松　長　恵　史

八世紀に興り、約四百年ほど続いたとされるパーラ朝は、現在のバングラデシュ地域にパハルプル（Paharpur）・ジャガッダラ（Jagaddala）等の大寺院を建造した。この地域では、これらの寺院や周辺地域を中心にパーラ美術様式に基づく作品が数多く作像されたことが、現在出土している遺品などからわかる。

それらの遺品はダッカ国立博物館をはじめとし、バングラデシュ南東部コミラ地区のマイナマティ博物館、さらにパハルプルやヴァスヴィハーラ遺跡をその地域内に含むラージシャヒ地区のヴァレンドラ博物館に収められている。また、パハルプル遺跡の隣にはパハルプル博物館、マハスタン地区にはマハスタン博物館があり、それぞれ周辺から出土した遺品を少数ではあるが収蔵している。さらに、バングラデシュ地域からの出土品は、同じベンガル地区にあたるカルカッタのインド博物館においても確認することができる。

今回現地調査した博物館の収蔵品は、ダッカ博物館が最も充実しており、ついで周囲に多くの密教遺跡を含むヴァレンドラ博物館が豊富である。また数の上では、ヒンドゥー教に属するものが最も多く、ついで仏教の遺品が豊富である。

今日まで、バングラデシュを含む東ベンガル地区の密教遺品調査は、日本ではほとんど行われていない[(1)]。しかし、この地域は古来よりインド文化の東流の玄関口であり、他の地域より出土している密教遺品の考察を行う上においても、東ベンガル地区の出土品を調査することは極めて重要であると言えよう。

現在のバングラデシュの中央部を流れるパドマ川下流域であるタームラリプティは、五世紀ころから海路によってインドへ向かう求法僧たちの主要な上陸地であった[(2)]。やがて八世紀に入ると、東ベンガル地区ではパーラ朝の興起に従い、密教が流行した。これらの地域で作像されたいわゆるパーラ様式と呼ばれる密教尊像は、東南アジア各地で出土している密教遺品と極めて高い類似性が認められる。海洋交通の発達にともない、東ベンガルで流行した密教が東南アジア各地に影響を及ぼしたことも推測しうる。

さて、今回考察するバングラデシュ各地に収蔵されている密教遺品は、パーラ朝での作例の特徴である黒色玄武岩で刻まれた石像がその大部分を占める。そのほか、三センチから五センチのやや小型のブロンズ像が多数出土している。

これらの一々の尊名や出土地等の詳しい内容については別稿に譲るとして、この小論では、パーラ美術作品の特徴の一つともいえる光背に施された五仏を取り上げたい。

インド各地で出土したパーラ朝期の密教遺品の特徴として、光背もしくは台座に法身舎利偈を刻むことはよく知られている。(3)

さらに、もう一つの大きな特徴として光背の上部に五種の印相を示す結跏趺坐の如来が施されている例をあげることができる。このようにまとまった形で四仏もしくは五仏を配する形式の遺品としては、仏塔の周囲に如来や菩薩が配されたものがある。これらの遺品は、インド各地でかなりの数が発見されており、既に詳しく報告されている。(4) この中でもビハール州を中心とする東インド地域では、金剛界四仏として安定している触地印・与願印・禅定印・施無畏印などの印を結ぶ如来が仏塔の四方に配される例が多い。

パーラ美術の作例の典拠となる経軌は、主として瑜伽部以降、特に無上瑜伽部系統の諸経軌であることは時代的に見ても間違いないであろう。パーラ朝の支配下にあった地域からの出土品に施された四仏や五仏には、瑜伽部以降の経軌の中で体系化された毘盧遮那をはじめとする阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の五仏の図像確立が影響を与えたことは十分に推測できる。

いわゆる金剛界五仏の印相は、『初会金剛頂経』をはじめとする経軌では、覚勝(智拳)印・触地印・与願印・禅定印・施無畏印である。出土している遺品から判断して、これら五種の印相のうち、毘盧遮那の智拳印を除く金剛界四仏の印相は安定していると言える。しかし、今回取り上げる光背に施された五仏のうちの一尊は、例外なく智拳印ではなく、転法輪印を結ぶ尊像である。毘盧遮那の印相については、従来より智拳印と転法輪印の関係が問題とされている。

この問題については、栂尾祥雲博士が『初会金剛頂経』等に毘盧遮那の印相として説かれる覚勝印（bodhyagrī-mudrā）に対して、覚支印（bodhyaṅgī-mudrā）を転法輪印とし、覚支印は無上瑜伽部に属する毘盧遮那の印相であると提言した。(5) この覚支印は、後期無上瑜伽部に属する文献であるアドヴァヤヴァジラ（Advayavajra）の『パンチャーカーラ』や、アバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta）の『ニシュパンナヨーガーヴァリー』および、『サーダナマーラー』等の後期図像資料にその記述を見出しうる事を指摘している。

しかしその後、氏家覚勝教授は写本等の研究により、覚支印の存在は疑わしく、さら

に覚支印と転法輪印を結びつけることにさえも根拠が認められないとしている。[6] また、氏家教授は転法輪印を結ぶ毘盧遮那の文献上の典拠を、『初会金剛頂経』第二品降三世品の釈タントラとされる『悪趣清浄軌』の中に求め、転法輪印を結ぶ毘盧遮那は八世紀には存在していたとしている。

遺品の面から見てもタボ等の大日堂[7]やラマユル寺獅子厳堂[8]、さらにボロブドゥールの毘盧遮那は転法輪印を結んでおり[9]、転法輪印の毘盧遮那が実際に作像されたことは明らかである。覚支印が転法輪印であるかどうかについては、さらに詳しい考察が必要であるが、現存する遺品から判断すれば、明らかに毘盧遮那の印相として覚勝（智拳印）と転法輪印の併存が認められる。以上のことから、智拳印の毘盧遮那だけでなく、転法輪印の毘盧遮那に阿閦等の四仏を加えた五仏の構成が現存していた可能性は高い。

しかし、無上瑜伽部の文献資料は一部を除いて[10]毘盧遮那をはじめとする五仏の印相を説いていない。このため、遺品に施された五仏を無上瑜伽部の文献資料のみで裏づけることはできない。しかし、今回取り上げる光背の五仏のようにパーラ朝下で作像された遺品には、瑜伽部の諸経軌で体系化された毘盧遮那をはじめとする阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就と判断可能な五仏が施されているものは多い。パーラ朝の遺品においても、その作像過程でこれら五仏がなんらかの影響を与えていることは間違いないであろう。

では無上瑜伽部の諸経軌に基づいて作像されたパーラ朝の遺品に、いかなる理由で五仏が配されるのであろうか。ここで考慮しなければならないことは部族（kula）の問題である。

密教の経軌では、複数の尊格を整理体系化し、属性を規定するために部族説が重視される。部族の展開の研究は十分になされてはいないが、まとまった研究としては頼本富宏博士のものがある。[11]

三尊形式にともなう仏部・蓮華部・金剛部の三部の成立と、金剛頂経系の諸経軌に見られる仏部・金剛部・宝部・蓮華部・羯磨部の成立はよく知られているところである。この三部や五部の思想は、密教経典の重要な思想であるものの、中期密教経典である『大日経』や、『初会金剛頂経』の梵本・チベット訳、また漢訳の『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』（以下『三巻本教王経』）・『一切如来真実摂大乗現証三昧大教王経』（以下『三十巻本教王経』）などには、まとまった形として説かれることはないことが指摘されている。[12]

三部の記述が最も早く見出される経典は、菩提流志訳の『一字仏頂輪王経』[13]である。この経典には、仏部法・観世音部法・金剛蔵菩薩部法という記述が見出される。[14]さらに、三部がもっとも体系化された経典は、善無畏訳の『蘇悉地羯羅経』[15]（以下『蘇悉地経』）

である。『蘇悉地経』では、仏を主尊とする仏部、観音を主尊とする蓮華部、さらに金剛を主尊とする金剛部のいわゆる仏・蓮・金の三部が説かれ、この三部が上・中・下の三種悉地と共にこの経典の中心教理になっている。『大日経』が仏・蓮・金の三部の要素を取り入れていることは明らかである。しかし、本文中には仏部・蓮華部・金剛部という直接の表現は見出せない。

部族によって諸尊を分類する部族説が頻繁に説かれるのは、『一字仏頂輪王経』や『大仏頂広聚陀羅尼経』等の仏頂系の諸経軌であることが指摘されている。[16] これら仏頂系の諸経軌では、『蘇悉地経』に代表される仏・蓮・金剛の三部族に新たに摩尼族もしくは宝部と呼ばれる第四の部族が登場する。さらに、金剛頂経系の諸経軌において、第五の部族として羯磨部が加わり、最も体系化された五部（族）が構成される。

金剛頂経系の諸経軌は、部族の成立という観点から見れば大きく二通りに分類できる。『初会金剛頂経』の梵本・チベット訳、また漢訳の『三巻本教王経』・『三十巻本教王経』では、金剛界品・降三世品・遍調伏品・一切義成就品のいわゆる四大品に重点をおいて説かれ、五部族の体系化は不十分である。

しかし、金剛頂経系諸経軌の中で、訳出の最も早い漢訳資料である『金剛頂瑜伽中略出念誦経』（以下『略出念誦経』）には、

「[17]即ち、鑁字を以て如来部を想え。

　　吽字を以て金剛部を想え。

　　怛囉二合字を以て宝部を想え。

　　縛唎二合字を以て蓮華部を想え。

　　㘑字を以て羯磨部を想え。」

という記述があり、五部のそれぞれの名称と主導である五仏の種字との対応が示されている。

さらに、不空撰述の『都部陀羅尼目』には、

「[18]その経、五部を説く。

仏　部、毘盧遮那仏、以て部主と為す。

金剛部、阿閦仏、以て部主と為す。

宝　部、宝生仏、以て部主と為す。

蓮華部、阿弥陀仏、以て部主と為す。

羯磨部、不空成就仏、以て部主と為す。」

と記され、五部とそれぞれの部族の主尊である金剛界五仏との対応を明確に示している。また、五部と金剛界五仏を対応させ、それを教理の中心として説く経典に、金剛

頂経の第三会とされている『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』[19]（以下『金剛頂タントラ』）があげられる。

このように、『初会金剛頂経』の梵本・チベット訳、また漢訳の『三巻本教王経』・『三十巻本教王経』などの経典に対して、やや系列が異なると考えられる『略出念誦経』や『金剛頂タントラ』等の諸経軌では、五部と五仏の対応が教義の中心となるところが大きな特徴である。この瑜伽部の諸経軌で体系化された五部族説は、無上瑜伽タントラにも引き継がれ、さらに第六仏・第六部が登場することになる。

密教経典における部族の展開は以上のように考察されているが、先述のように無上瑜伽部の文献資料には、一部を除き五仏の印相は説かれない。つまり、今回の考察対象の遺品のように、無上瑜伽部の諸経軌に基づいて作像されたであろう遺品に、単独尊としての金剛界五仏が施される可能性は低くなる。ただ、部族説は無上瑜伽の諸経軌にも引き継がれることは明らかであり、それぞれの部族の代表尊としての五仏が施された可能性は考慮しなくてはならない。

今回考察する転法輪印・触地印・与願印・禅定印・施無畏印の五種の印相で構成される光背の五仏が、瑜伽部系経軌に示される金剛界五仏を表すのか、仏部・金剛部・宝部・蓮華部・羯磨部の五部族を表すのかは断定することはできない。しかし、それぞれの遺品を比較検討してみると、光背上の五仏の配列にはある一定の規則が認められる。光背に施される五尊のうち中央にくる尊像が、一部を除いて[20]その遺品の主尊によってほぼ一定している。すなわち主尊の直上に施される尊像の印相が、その主尊の何らかの属性を示していると見るのが最も自然であろう。

さて、光背に五仏が施されている遺品は、ダッカ博物館に四尊・ヴァレンドラ博物館に九尊・パハルプル博物館に一尊、またカルカッタのインド博物館に三尊・ナーランダー博物館に一尊の合計十八尊確認できた。これらの遺品はすべて石像で、素材は前述のようにパーラ朝の作例の特徴を示す黒色玄武岩が使われている。大きさは約一・五メートルから二・五メートルまでで、作像年代は、十世紀から十二世紀の間に集中している。出土地別に見てみると、バングラデシュ北西部のボーグラ地区から八尊と最も多く、次いで南部に当たるダッカ地区から六尊出土している。十八尊の尊像別の内訳は次のようになる。

如来像三尊

坐像如来（触地印）　一尊

立像如来（与願印）　一尊

立像如来（欠　損）　一尊

菩薩像十尊

カサルパナ・ローケーシュヴァラ　三尊

スガティサンダルシャナ・ローケーシュヴァラ　一尊

ハリハラ・ローケーシュヴァラ　一尊

ローカナータ　三尊

マンジュヴァラ（内一尊両手欠）　二尊

女尊像五尊

カディラヴァニー・ターラー　三尊

マーリーチー　一尊

パルナシャバリー　一尊

これらの尊像と光背に施された五仏との関係を〔表〕に示しておく。（本稿末に掲載）

まず、如来像であるが、これらの尊像に施される光背五仏の中央の像はいずれも触地印を結んでいる。

次に菩薩像では、観音（Avalokiteśvara）系の尊格である、カサルパナ・ローケーシュヴァラ、スガティサンダルシャナ・ローケーシュヴァラ、およびローカナータには、光背の中央に定印如来が配される。ただ、今回取り上げる観音系の諸尊と判断できる遺品の中での中で、インド博物館に収蔵されている一遺品だけは、光背中央に転法輪印如来が施されている。また、マンジュヴァラと表記される尊像は二尊出土しているが、転法輪印如来が施されるものと、触地印如来が施されるものがそれぞれ一遺品づつ確認できる。

また女尊像では、カディラヴァニー・ターラーには施無畏印、マーリーチーには転法輪印、パルナシャバリーには施無畏印の印相を結ぶ如来がそれぞれの光背の中央に配されている。これらの尊像の図像学上の特徴は、後期図像資料である『サーダナマーラー』（Sādhanamālā）の中に記されている。

まず、如来像のうち触地印を結ぶ坐像は、台座の上に金剛杵が置かれている。この図像表現は、『サーダナマーラー』によると、金剛宝座如来（Vajrāsana）とされている。[21] この触地印如来の光背の中央には、やはり触地印の尊像が配される。金剛部の主尊である阿閦と図像的に同じ様相をもつ金剛宝座如来に、その部族のしるしである触地印如来が施されたのかもしれない。

次に、立像の如来像であるが、二尊のうち一尊は両手が欠損しており印相が明らかではない。しかし、これらの尊像は、図像的には明らかに釈迦如来である。釈迦如来の単

独像は、ガンダーラ美術の時代から盛んに作られてきたが、パーラ美術の遺品の中からも数の上では少ないものの目にすることができる。なぜ釈迦如来の光背中央に触地印如来が配されるのかはあきらかではない。ただ、後期密教に入って降魔形如来像つまり触地印を結ぶ如来像が、著しく多くなるのと無関係ではないであろう。[22]

次に、アヴァローキテーシュヴァラ（Avalokiteśvara）の名称に総称される観音系のカサルパナ・ローケーシュヴァラ（Khasarpaṇa Lokeśvara）、スガティサンダルシャナ・ローケーシュヴァラ（Sugatisandarśana Lokeśvara）、ローカナータ（Lokanātha）の諸尊である。

観音系の諸尊は、後期密教が流行した時代にも、多くの信仰を集めていたことが出土している遺品の上からも明らかである。「サーダナマーラー」にも多くの観音の成就法が説かれており、さらに、後期密教美術の分野で数々の業績を残しているバッタチャリヤはそれらを十五種に分類している。[23] 今回はそれぞれの図像的な部分まで立ち入ることはできないが、これらの蓮華を標幟とする諸尊が、阿弥陀如来の部族である蓮華（法）部に属すことは明らかである。それぞれの尊像の光背の中央には一尊を除いて定印如来が配されている。金剛界三十七尊のうち、阿閦・宝生・阿弥陀・不空成就の四仏を取り囲む十六大菩薩の一尊に金剛法菩薩がある。金剛法菩薩は図像的にいえば、聖観音であり、阿弥陀如来を囲む四親近菩薩の筆頭である。このことからも観音と阿弥陀との近い関係が認められる。また、美術遺品においても、観音の宝冠に定印如来を施す作例が、西インドの石窟寺院を中心に数多く見出すことができ、観音と定印如来の関係は、図像的には比較的古くから安定していると言えるであろう。ただ、カルカッタのインド博物館に収蔵されている遺品については、別の考察が必要である。

この遺品は、蓮華座の上に遊戯坐で坐し、転法輪印を結び、その左肩の上部には台座からのびる開敷蓮華が施されている。さらに、右脇侍としてターラー、左脇侍としてブリクティーが配されている。これらの図像の構成から判断すれば、この尊像は観音系の尊像であることは間違いない。与願印を結ぶことの多い観音系の尊像の中で、転法輪印を結ぶ観音として、『サーダナマーラー』には、ハリハラ・ローケーシュヴァラ（Harihara Lokeśvara）が説かれている。[24] また、この遺品の光背五仏の中央には、観音系の諸尊に配されることの多い定印如来ではなく、転法輪印の尊像が位置している。この尊像に関しては、転法輪印に示される部族、つまり仏部に属することを表しているのであろうか。ただ、この遺品は他の作例とは違い、ストゥーパの形に形取られた仏龕の内部に浮き彫りされている。ストゥーパ状の仏龕内に尊像を施した作例は、ボロブドゥールの回廊の仏伝図やその上部の四仏に見受けることができ、それらの尊像はすべて如来像で

ある。[25] このような作例が、どのような教理に裏付けされるのか、文献上の根拠は明らかではないもの、民衆の信仰の厚かった観音が転法輪印を結ぶ如来像とオーバーラップしたのではなかろうか。

マンジュヴァラ（Mañjuvara）は、アラパチャナ、シッダエーカヴィーラ、マンジュゴーシャ等と並ぶ文殊菩薩の一種である。『サーダナマーラー』には、マンジュヴァラの成就法が次のように説かれている。

「転法輪印[26]を結び、般若波羅蜜をのせた青蓮華を持って、獅子に乗り、遊戯坐に座し、あらゆる荘厳で飾られている……」

このように、マンジュヴァラは獅子に乗り、転法輪印を結び、青蓮華に梵夾を載せた持物を手にすることがその特徴である。インド各地で目にすることのできるアラパチャナを除く文殊の遺品は、そのほとんどが青蓮華を手にしている。ただ青蓮華上の梵夾の有無については、遺品によってばらつきがある。今回取り上げるマンジュヴァラ二尊の遺品のうち、ヴァレンドラ博物館の遺品は両手が欠損しており印相はわからない。しかし、その他の特徴については、梵夾の有無の問題は別として『サーダナマーラー』の記述と一致している。しかし、このマンジュヴァラ二尊の遺品に関しては、光背に施される中央尊には相違が見られる。ヴァレンドラ博物館の遺品では、中央尊として転法輪印如来が施されるのに対して、ダッカ博物館の遺品には触地印如来が配されている。マンジュヴァラとは異なる尊像であるが、インド博物館には、光背の中央部に転法輪印の尊像が一尊のみ施されたマンジュヴァジラ（Mañjuvajra）が収蔵されている。[27] この遺品から判断すれば、マンジュヴァラやマンジュヴァジラは、転法輪印に象徴される仏部の部族に属するものと推測できる。

では、ダッカ博物館の遺品だけが、なぜ光背五仏の中央尊として触地印如来が配されるのであろうか。マンジュヴァラの図像的な特徴が、獅子に乗ることであるのは前述した。同様の図像表現を取るものとしてマンジュゴーシャ（Mañjughoṣa）がある。『サーダナマーラー』では、マンジュゴーシャを次のように述べている。

「獅子[28]に乗り、サフラン（赤）色をし、あらゆる荘厳で飾られ、vyākhyāna 印を結び、左手で青蓮華を持ち、宝冠に阿閦の像をいだく……」

ここに記される vyākhyāna 印がいかなるものかはわからないが、インド各地から出土しているマンジュゴーシャの遺品[29]から判断すれば、一種の説法印であることがわかる。また、マンジュゴーシャの大きな特徴の一つとして宝冠に阿閦の像を施すことが説かれている。この阿閦の像の存在がマンジュゴーシャの図像の判断の決め手となるであろう。ダッカ博物館の遺品は、その印相が本来持っている意味からは区別のつきにくい

vyākhyāna（説法）印と、dharmacakra（転法輪）印とが混乱し、転法輪印を結ぶ尊像に作られた可能性も考えられる。以上のことを考慮して、ダッカ博物館のマンジュヴァラの遺品は、光背に施された中央尊から判断して、マンジュゴーシャである可能性も考慮しなくてはならない。

『サーダナマーラー』の中には、文殊（Mañjuśrī）系の諸尊の成就法が四十一種説かれる。その中で、マンジュゴーシャの頭部に阿閦の像を施すのと同様に、それぞれ尊格に、如来像を施すことを説いたものが多く見受けられる。例えば、ヴァジララーガ（Vajrarāga）[30]やダルマダーツ・ヴァーギーシュヴァラ（Dharmadhātu Vāgīśvara）[31]には、阿弥陀の像を施こし、シッダエーカヴィーラ（Siddhaikavīra）[32]やナーマサンギーティ・マンジュシュリー（Nāmasaṅgīti Mañjuśrī）[33]の頭部には、阿閦を施こすことが『サーダナマーラー』に記されている。このように、観音系の諸尊とともに、パーラ朝期に多くの作例を見い出せる文殊は、単独の部族に属するのではなく、様々な部族に属するものと推測できる。

最後に女神像についてみてみよう。

カディラヴァニー・ターラーは、インドに残される密教遺品の中でも相当数確認できる。ターラーはもともと『大日経』などの胎蔵系資料に見られるように、観音院に配され、観音との結びつきが強い尊像である。各地で出土している遺品においても、観音系の諸尊を中尊とし、その左右にターラー（Tārā）とブリクティー（Bhṛkuṭī）を配した一種の三尊形式のものを目にすることができる。

瑜伽部および無上瑜伽部の諸経軌には、多羅が仏眼・摩々枳・白衣とともに四明妃として説かれている。この仏眼以下の四明妃は、『悪趣清浄タントラ』をはじめとし、その他無上瑜伽タントラに主として説かれることが既に指摘されている。[34]これらの文献では、ターラーは北方に配される不空成就の明妃とされている。

また、『サーダナマーラー』のカディラヴァニー・ターラーの成就法には、次のように説かれている。

「カディラヴァニー・ターラー[35]は緑色で、宝冠に不空成就の像をいだき、右手に与願印を結び、左手に青蓮華を持つ……」

この記述からも、カディラヴァニー・ターラーと不空成就との関係が認められる。

今回取り上げた三尊のカディラヴァニー・ターラーの光背の中央には、例外なく施無畏印を結ぶ尊像が施されており、後期密教においては、カディラヴァニー・ターラーは羯磨部の部族に属することがわかる。

また、パルナシャバリーの『サーダナマーラー』の成就法には、次のように記されて

いる。

「パルナシャバリー[36]は三つの顔と三眼と六本の手を持つ。（中略）宝冠に不空成就の像をいだく……」

ダッカ博物館のパルナシャバリーの光背中央部にも、施無畏印を結ぶ尊像が施されている。このことから、パルナシャバリーが、カディラヴァニー・ターラーと同様に羯磨部の部族に属すると考えられる。

次に、マーリーチーであるが、この尊格もターラーとともにパーラ朝期に忿怒形の作例が多い。このマーリーチーの遺品の光背の中央には、転法輪印を結ぶ尊像が施こされている。マーリーチーの頭上に転法輪印の尊像を記することについては、既に栂尾博士がサーダナマーラーの（Kalpokta-mārīcī-sādhana）の記述[37]と、インド博物館に収蔵されているマーリーチーの遺品とを照合している。それに基づき、光背の転法輪印如来の存在を、マーリーチーの特徴の一つとしてあげている。いかなる理由で、マーリーチーの頭上に転法輪印の尊像を配するのかは明らかではない。ただ、出土している遺品から判断する限りでは、マーリーチーは、転法輪印に示される部族、つまり仏部の尊像として分類されるのかもしれない。

以上のように、光背五仏の施こされた遺品を考察したが、結論として次のことが言えよう。

①光背五仏は、通常、転法輪印・触地印・与願印・禅定印・施無畏印で構成される。

②光背五仏のうち、中央部に来る尊格は、その遺品の主尊による規則性がある。

③中央に来る尊格以外の四尊の配列には、規則性は認められない。

前述したように、遺品の光背に五仏を施す作例は、東ベンガル地区を中心に見出すことができる。このような作例が、パーラ朝美術に代表される後期密教美術の特徴であることは確かであろう。今回の限られた遺品の考察だけで結論を下すのは多少危険があるが、光背に施こされた五仏が、その下方部に位置する主尊の部族を示しているであろうことは、十分に推測される。

また、これらの遺品の光背五仏が五部族を表していると見た場合、無上瑜伽タントラが流行したと考えられる時期に製作された尊像に、瑜伽部系の諸経軌で体系化された五部族が取り入れられていることになる。ただ、前述のように、無上瑜伽部、特に母タントラ系の諸経軌では、五部族をさらに発展させて第六部族を生み出すことになる。現在のところ、遺品の光背に六尊の尊像を施した作例を目にしたことはない。これまでに出土している遺品から判断する限りでは、瑜伽部系の諸経軌が生み出した五仏・五部族の教理は、無上瑜伽部の諸経軌が流行した期間においても、相当に強い影響を残している

ようである。

今回は主として東ベンガル地区の光背五仏の遺品を取り上げたが、これらの作例以外にも、各地の博物館に現在展示されていない遺品や、個人蔵の作例もいくらかは存在しているようである。今回は紙面の関係もあり、現地調査した遺品に限ったが、今回取り上げきらなかった遺品を含む考察は別の機会に行いたい。

注（1）バングラデシュの遺跡・遺品のまとまった報告として、村主恵快氏の「東パキスタンの仏教遺跡」『仏教芸術』65がある。

（2）海路研究の主なものとして次のものがある。
石田幹之助『欧米における支那資料』創元社　1943年。
同　　『南海に関する支那資料』生活社　1945年。
藤田豊八「東西交渉史の研究・南海篇」東亜史研究３の２。
また、唐代の僧である義浄の『南海寄帰内法伝』や『大唐西域求法高僧伝』には、当時の海路による入天僧の記述が多く見られる。

（3）頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館　1990年、p.588。

（4）頼富本宏　前掲書　pp. 593～607。

（5）栂尾祥雲『理趣経の研究』密教文化研究所　昭和33年、p.477。

（6）氏家覚勝「タボ寺大日堂の仏像構成と問題点」pp. 27～46。
『第四回チベット仏教文化調査団報告書』1983年。

（7）氏家覚勝　前掲論文　p.28。

（8）松長有慶・加藤敬『マンダラ』p.205。

（9）チャンディ・ボロブドゥールの転法輪印如来の尊名比定については諸説あるが、筆者は最上部の格子状のストゥーパ内に収められている転法輪印如来が毘盧遮那であると考えている。また、インドネシア（特にジャワ島）では、智拳印を結ぶ如来像が多数出土しているが、それに劣らず転法輪印を結ぶ毘盧遮那と判断できるブロンズ像が多数見出せる。

（10）前述のように、『パンチャカーラ』や『ニシュパンナヨーガーヴァリー』・『サーダナマーラー』には、毘盧遮那の印相が説かれる。

（11）頼富本宏「密教における部族（kula）の展開」昭和56年，
『勝又俊教博士古稀記念論集・大乗仏教から密教へ』春秋社　pp. 424～429。

（12）頼富本宏　前掲論文　p.423。

（13）『大正新脩大蔵経』第19巻　No.951。

（14）　同　　第19巻　p.263a。

（15）　同　　第18巻　No.893。

（16）頼富本宏　前掲書　p.115。

（17）『大正新脩大蔵経』第18巻　p.225a。

（18）　同　　第18巻　p.898c。

（19）東北　No.480、大谷　No.113。

（20）ヴァレンドラ博物館のマンジュヴァラ（写真(2)）の遺品のみ、光背に転法輪印如来が二尊施されており、与願印如来が存在しない。

（21）B. Bhattacharyya : Sādhanamālā, G.O.S., No. 26, Baroda, 1968, p. 24。

（22）佐和隆研『密教美術の源流』法蔵館　昭和57年、pp. 101～105。

(23)　B. Bhattacharyya : The Indian Buddhist Iconography, reprinted edition, Calcutta, 1968, p. 124。
(24)　B. Bhattacharyya : ibid., p. 429。
(25)　宇治谷裕顕『ボロブドゥールの研究』アジア文化交流センター　昭和62年。
(26)　B. Bhattacharyya : Sādhanamālā, G.O.S., No. 26, Baroda, 1968, p. 111。
(27)　頼富本宏「インド現存の文殊菩薩」『仏教思想史論集・1』成田山仏教研究所　昭和63年、p.709、図版17。
(28)　B. Bhattacharyya : Sādhanamālā, p. 109。
(29)　頼富本宏　前掲論文　pp. 707～708。
(30)　B. Bhattacharyya : Sādhanamālā, p. 129。
(31)　B. Bhattacharyya : ibid., p. 128。
(32)　B. Bhattacharyya : ibid., p. 140。
(33)　B. Bhattacharyya : ibid., p. 160。
(34)　松長有慶「四金剛女と四明妃」『勝又俊教博士古稀記念論集・大乗仏教から密教へ』春秋社　昭和56年。
(35)　B. Bhattacharyya : Sādhanamālā p. 176。
(36)　B. Bhattacharyya : ibid., p. 308。
(37)　B. Bhattacharyya : ibid., p. 277。

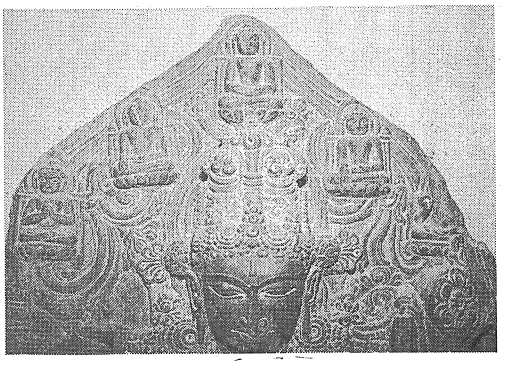
キーワード　＜パーラ朝、パーラ美術、サーダナマーラー、バングラデシュ、五仏＞

尊　名	スガティサンダルシァナ・ローケーシュヴァラ Sugatisandarśana Lokeśvara	マンジュヴァラ Mañjuvara	ローカナータ Lokanātha	マーリーチー Mārīcī	カディラヴァニー・ターラー Khadiravaṇī Tārā	カディラヴァニー・ターラー Khadiravaṇī Tārā
出土地	ラージシャヒ (Rajshahi)	ラージシャヒ (Rajshahi)	ダッカ／ヴィクラムプル (Dhaka/Vikrampur)	ダッカ／ヴィクラムプル (Dhaka/Vikrampur)	ボーグラ (Bogra)	ラージシャヒ (Rajshahi)
製作年代	12AD	11AD	10AD	10AD	11AD	12AD
光背五仏	転・与・定・触・施	定・施・転・触・転	与・施・定・触・転	触・与・転・定・施	与・定・施・転・触	与・定・施・転・触
主尊印相	与願印	欠損	与願印	Tarjanī 印	与願印	与願印
坐　法	立像	遊戯坐	立像	立像	立像	遊戯坐
台　座	二重蓮華座	獅子座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座
持　物 その他の 特　徴	右：一手　施無畏印 二手　与願印 三手　数珠 左：一手　与願印？ 二手　梵夾 三手　蓮華 左右脇侍各二尊 右外）ターラー 右内）スダナクマーラ 左外）ブリクティー 左内）ハヤグリーヴァ	主尊左右に青蓮華	左手に開敷蓮華 左右脇侍 右）ターラー 左）ハヤグリーヴァ	台座の下に七匹の豚 三面八臂 左：一手　Tarjanī印 二手　不明 三手　弓 四手　花束 右：一手　不明 二手　金剛杵 三手　棒状の物 四手　矢	左手に青蓮華 右側に開敷蓮華 左右脇侍 右）アショカカーンター 左）エーカジャター	左手に青蓮華 左右脇侍 右）アショカカーンター 左）エーカジャター
収蔵場所	ヴァレンドラ博物館 写真(1)	ヴァレンドラ博物館 写真(2)	ヴァレンドラ博物館 写真(3)	ヴァレンドラ博物館 写真(4)	ヴァレンドラ博物館 写真(5)	ヴァレンドラ博物館 写真(6)

尊　名	カサルパナ・ローケーシュヴァラ Khasarpana Lokeśvara	如来像	如来像	ヴァジラアーサナ Vajrāsana	カサルパナ・ローケーシュヴァラ Khasarpana Lokeśvara	マンジュヴァラ Mañjuvara
出土地	ダッカ／ヴィクラムプール (Dhaka/Vikrampur)	不明	不明	ダッカ／ヴィクラムプール (Dhaka/Vikrampur)	ダッカ (Dhaka)	ラージシャヒ／ムンシガンジュ (Rajshahi/Munsiganj)
製作年代	11AD	12AD	不明	11AD	10AD	11AD
光背五仏	与・触・定・転・施	転・与・触・定・施	施・与・触・定・転	与・転・触・施・定	与・施・定・転・触	与・転・触・定・施
主尊印相	なし	欠損	与願印	触地印	与願印	転法輪印
坐　法	輪王坐	立像	立像	結跏趺坐	遊戯坐	遊戯坐
台　座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	獅子座
持　特 その他の特　徴	宝冠内定印如来 左右脇侍各二尊 右外）ターラー 右内）スダナクマーラ 左外）ブリクティー 左内）ハヤグリーヴァ	左右脇侍 右）観音（蓮華） 左）弥勒（蓮華上水瓶）	左右脇侍 尊名不明	台座下獅子 蓮華座上金剛杵 左右脇侍 右）弥勒（蓮華上水瓶） 左）観音（蓮華）	左右脇侍各二尊 右外）ターラー 右内）スダナクマーラ 左外）ブリクティー 左内）ハヤグリーヴァ	両側に青蓮華上梵夾
収蔵場所	ヴァレンドラ博物館 写真(7)	ダッカ博物館 写真(8)	ダッカ博物館 写真(9)	ダッカ博物館 写真(10)	ダッカ博物館 写真(11)	ダッカ博物館 写真(12)

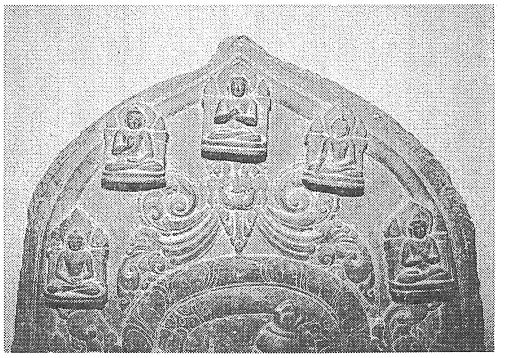
尊　名	パルナシァバリー Parṇaśabarī	ローカナータ Lokanātha	カサルパナ・ローケーシュヴァラ Khasarpaṇa Lokeśvara	ハリハラ・ローケーシュヴァラ Harihara Lokeśvara	ローカナータ Lokanātha	カディラヴァニー・ターラー Khadiravaṇī Tārā
出土地	ダッカ／ヴァジラヨーギニー (Dhaka/Vajrayoginī)	パハルプル Paharpur	不明	ビハール Bihar	ビハール Bihar	不明
製作年代	10AD	不明	不明	10AD	11AD	不明
光背五仏	与・転・施・定・触	欠・転・定・欠・触	転・与・定・触・施	定・触・転・与・施	転・触・定・与・施	転・触・施・与・定
主尊印相	Tarjanī 印	与願印	欠損	転法輪印	与願印	与願印
坐　法	立像（展左）	遊戯坐	立像	遊戯坐	遊戯坐	立像
台　座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座	二重蓮華座
持　物 その他の 特　徴	三面六臂 右：一手　金剛杵 二手　斧 三手　矢 左：一手　Tarjanī印 二手　葉 三手　弓	左右に開敷蓮華 左右脇侍 右）ターラー 左）ハヤグリーヴァ	左右に開敷蓮華 宝冠内定印如来 左右脇侍各二尊 右外）ターラー 右内）スダナクマーラ 左外）ブリクティー 左内）ハヤグリーヴァ	宝冠内定印如来 左右脇侍 右）ターラー 左）ブリクティー	左右に開敷蓮華 左右脇侍 右）スダナクマーラ 左）ハヤグリーヴァ	左右に青蓮華 左右脇侍 右）アショカカーンター 左）エーカジャター
収蔵場所	ダッカ博物館 写真(13)	パハルプール博物館 写真(14)	ナーランダー博物館 写真(15)	インド博物館 写真(16)	インド博物館 写真(17)	インド博物館 写真(18)

写真①—1



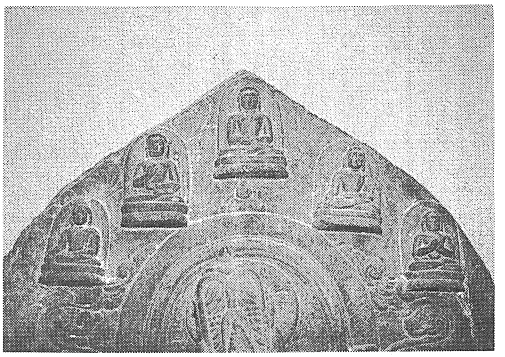
写真①—2

写真②—1



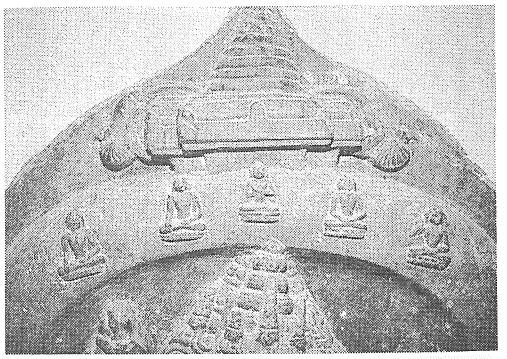
写真②—2

写真③—1



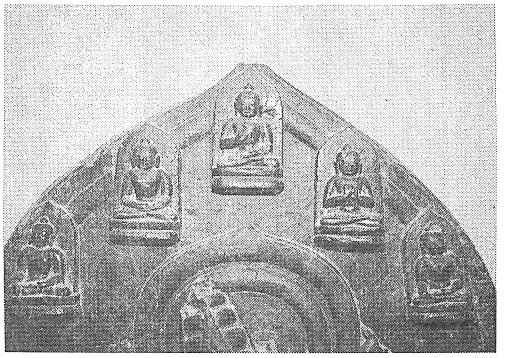
写真③—2

写真④―１



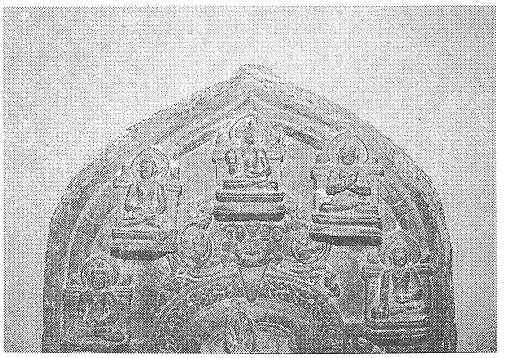
写真④―２

写真⑤―１



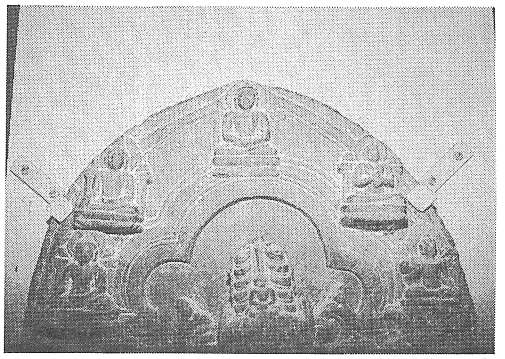
写真⑤―２

写真⑥―１



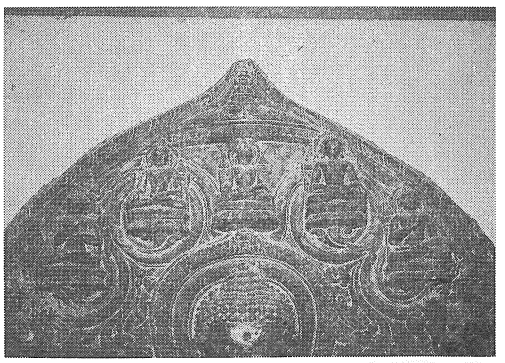
写真⑥―２

写真⑦―1



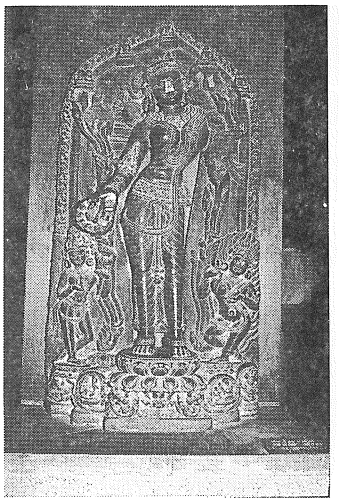
写真⑦―2

写真⑧―1

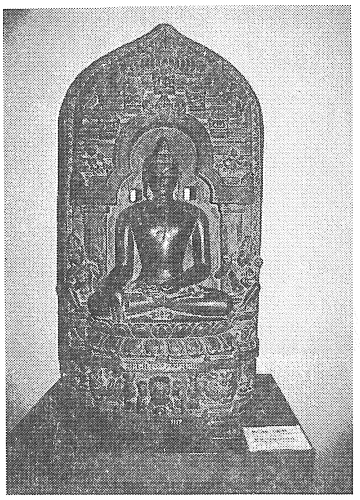


写真⑧―2

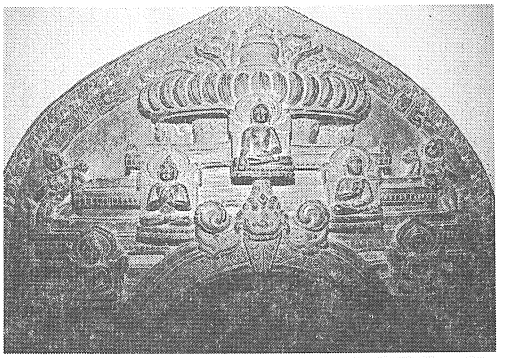
写真⑨



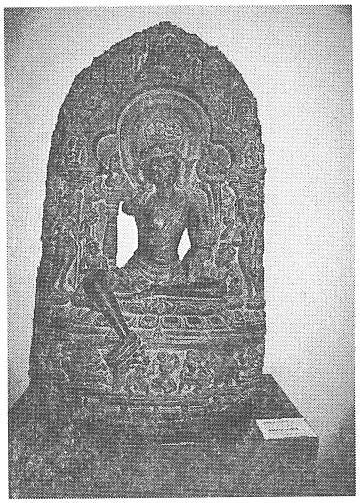
写真⑱



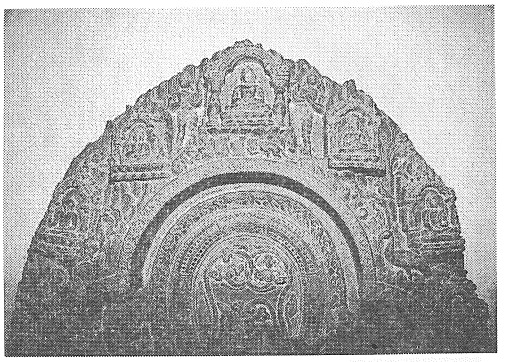
写真⑩—1



写真⑩—2

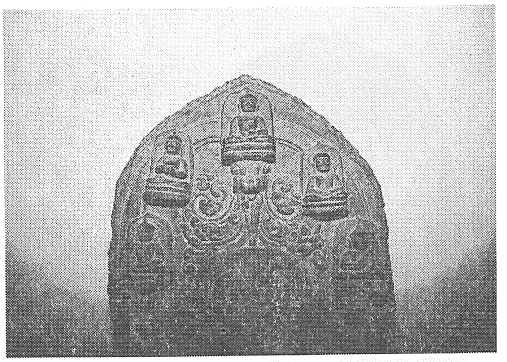


写真⑪—1



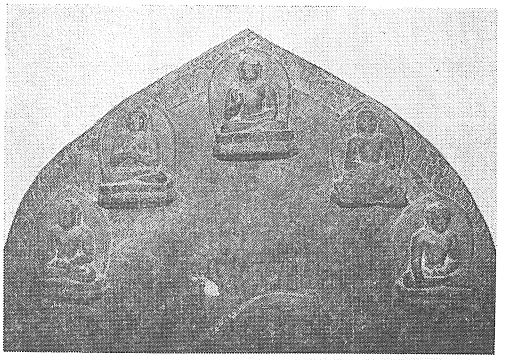
写真⑪—2

写真⑫—1



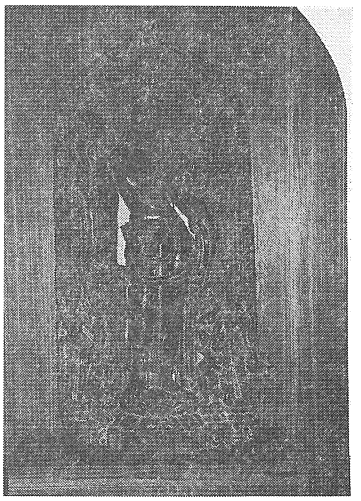
写真⑫—2

写真⑬―1



写真⑬―2

写真⑭



写真⑮

写真⑯

写真⑰